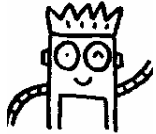


みなもとのよりと

よしつね

## 源頼朝 は、なぜ義経をたおしたの



頼朝がめざした、武士による政治の方向を、義経が理解していなかったから、などの説があるよ。

### 頼朝のめざす方向を、義経が理解していなかったからか

源頼朝は、それまでの貴族を中心とするしくみの国に代わって、武士を中心とする新しいしくみの国を、つくろうとしました。それには、御家人が、自分の命令にきちんと従うようにさせることで、自分の力を固め、朝廷に対抗することが必要でした。そのため御家人が、自分の推せんもなしに、朝廷から官位（官職の等級）をあたえられることを、禁止しました。ところが、1184年に京都に入った義経は、頼朝に相談しないまま、官位を受けてしまったのです。これは、頼朝のめざす方向に反するもので、頼朝をたいへん、おこらせてしまいました。

### 義経が、後白河法皇のたくらみにはまったからか

朝廷の中心人物であった後白河法皇は、頼朝の力をおさえて、ふたたび貴族を中心とするしくみの国にもどすことを、考えていました。そこで、義経を、朝廷で出世させて、味方につけ、頼朝と戦わせようと、考えたようです。頼朝は、義経が、戦いのときの兵の使い方に、天才的な能力をもっていることを認めていたので、後白河法皇に近づいていく義経を、警戒するようになりました。

### 義経の後ろに平泉の藤原氏がついている、と疑ったからか

義経は、頼朝の軍に参加するまで、奥州平泉（岩手県平泉町）の藤原氏のもとに、かくまわれていました。木曾義仲と平氏をたおした頼朝にとって、次の敵は平泉の藤原氏でした。うたぐり深い性格だった頼朝は、今も藤原氏が後ろについているかもしれない義経は、油断できない人物である、と疑ったようです。

頼朝が義経をたおそうとしたのは、これらのことが原因だ、といわれています。